

# 第6章 大震災を振り返って



台湾から贈られた手紙(避難所となった登米中学校に掲示された)

## 震災で学んだこと

南方中学校3年(当時:南方小学校6年)

星 朋日<sup>ともか</sup>さん



「グォーゴォゴゴゴゴ…ドンッ!」

その時起きたことは、一生忘れることはありません。私はまだ小学6年生でした。

帰りの会が終わり、友達と一緒に階段を降りようと思ったその時、今まで経験したことのない揺れに襲われました。階段が激しく揺れ、まともに立ってられない状況の中、たくさんの人の悲鳴が聞こえ、一瞬のうちに恐怖と不安でいっぱいになりました。母に迎えに来てもらい無事に帰宅することができました。そして、母の携帯で南三陸町の様子を見た私は衝撃を受けました。まるで高い壁のように濁った水が、木、車、たくさんの建物、土手の上の線路までも飲みこんでいたのです。私は、すぐに祖父母が無事なのか心配になりました。南三陸町には、私の祖父母が住んでいたからです。

次の日、私は祖父母の無事を確かめるため、家族と南三陸町へ向かいました。向う途中緊張と不安で胸が押しつぶされそうでした。息をするのもひどく、苦しくてたまりませんでした。「とにかく無事でいて!」その一心でした。南三陸町に入った途端、私は涙が止まりませんでした。町にあった建物は消え、あるのは原形をとどめていないほどぐちゃぐちゃになった車、どこから来たのか分からない家の屋根、たくさんのガレキが町を埋め尽くしていました。道路があった場所も線路があった場所もどこがどこか分かりませんでした。言葉にできないくらい悲しかったのを覚えています。私は、とにかく祖父母の家のある場所へ急ぎました。何とか無事でいてほしいと強く願いながら、ガレキの中を進みました。思いが届いたのか、祖父母は無事でした。無事を確認したとき、言葉では言い表せないほどの安心と喜びを感じました。私はすぐに走り寄り、自分の思いを伝えました。無事で良かったこと、また会えてうれしかったこと、迎えに来たということ、泣きたいのを抑え必死で伝えました。

私はこの震災で、「生命<sup>いのち</sup>」というものについて考えました。生と死を分けたものは何だったのか、私にはよく分かりません。ただ、たくさんの尊い命が失われたのは事実です。逃げ遅れてしまった人、津波に気付かなかった人、まだ生まれて間もない小さな命もありました。地震さえこなければ生きていられた人たち。この人たちのことを思うと、自分の生命<sup>いのち</sup>に対する考えが、これまでとは全く違うものになりました。「粗末にはいけない」「一生懸命生きなければ」という思いが、一層強くなりました。そして、家族を亡くした人の悲しむ姿を見て、自分だけの生命<sup>いのち</sup>ではないことも知りました。「生命<sup>いのち</sup>」は、何よりも重く、尊いものです。

私は自分の命も他人の命も大切に、突然命を絶たれて生きられなかった人の分まで、精一杯生きたいと思いました。

## 「絆」の力を知る

佐沼高校1年(当時:津山中学校1年)

佐藤 知実<sup>ともみ</sup>さん



私たちはあの日を境に何もかもが変わりました。忘れることのできない、忘れてはいけない、平成23年3月11日、午後2時46分。卒業式を翌日に控えた準備の日。いつもよりも早く下校していました。

誰もがいつもの地震だとは思わなかったはずですが。地震はすぐに収まるどころか、次第に強さを増していったのです。私が自転車に乗っている最中に地震は起き、すぐに家に帰りました。私の家は築70年以上の古い家です。家の中は足の踏み場もない状態でした。

今回の東日本大震災は、それ以前にあった地震にも耐えてきた家を傷めつけました。それだけではなく、人の物、命を一瞬にして奪っていきました。

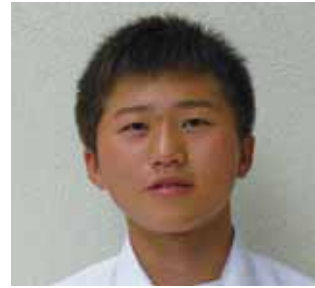
私の地区ではすぐに公民館が避難所として設けられました。集まったのは子供からお年寄りまで、総勢50人くらいです。この一週間の避難所生活を通して感じたのが「絆」です。あの頃はまだ肌寒い時期で、ストーブが必要でした。そんな中、毛布やストーブを持ってきてくれた家庭。食べ物も必要で米や野菜を持ち寄ったりもしました。また、お風呂に入れない日が続いた時には、お湯を沸かしてお風呂に入れるようにしてくれた親戚もいました。電気が使えるようにと、発電機を持ってきてくれた家もありました。その時に見たテレビの映像に誰もが釘付けになりました。私はテレビの映像と光景、入ってくる情報に言葉を失いました。私の住んでいるところは内陸部で地震のみでしたが、沿岸部の人たちは津波という悲惨な状況に襲われました。津波について、南三陸町の方の講演を聞く機会があり、その方は「津波が来る前は海の水が全て引いて海の底まで見えた」と写真を片手に話していました。そんな状況は恐ろしいという言葉では表わすことのできないものでした。そのような中でも、私が避難所で過ごした一週間も全て、地域の人と人との「絆」のおかげで生活ができ、ここまでこれたと思います。普段からの近所付き合いがあったからこそだと感じます。一人ではなにもすることができませんが、小さな力でもみんなが力を合わせることで、大きな力が生まれます。

震災は私たちから多くの物を奪いました。でも、なくなったものがある分、得られるものがあると私は思います。この震災を通してたくさんのことを学び、「絆」について知ることができました。私たちの周りにはいつも支えてくださる人がいます。その方々に感謝し、これからを生活していかなければなりません。どんな困難なことが待ち受けていたとしても、地域の人、支えてくださるたくさんの人と「絆」の力を大切に生きていきます。

## 将来の夢

津山中学校1年(当時:横山小学校4年)

佐々木 龍一さん



自分の将来について考え始めたのは、確か4年生くらいだったと思います。4年生の時は、やってみたい仕事はいろいろありました。ただ、これというもの一つに決めることはできずにいました。

しかし、あの日を境に変わりました。3.11です。ぼくはあの時の周りの変化に、ただ驚くばかりでした。大地震と津波。横山小学校の体育館は避難所になりました。戸倉地区の人や志津川の人たちがたくさん避難してきました。学校に行ってみると、体育館のわきで食事作りをしている人たちがいました。ぼくも何か手伝えないかと思いました。

停電が続いていたので、テレビがついたのはしばらくたってからでした。そこで見たものは、たくさん家が天津波に飲み込まれている様子。津波が引いた後の何もなくなった海岸。

僕が目撃したのが、自衛隊の皆さんの姿でした。自衛隊という仕事があることは知っていましたが、仕事の内容や姿は見たことがありませんでした。

テレビに映し出されている自衛隊員が、カッコいいというか、すごいというか、とても見ていて感動したのです。あの時は被災した様子を見ているだけで悲しくなっていました。学校の前の道路は、自衛隊車両がたくさん通りました。もくもくランドに待機しているたくさん自衛隊の人たちも見ました。「ぼくも、だれかのために仕事したい」、だんだんそう考えるようになりました。

「将来は自衛隊員になりたい」

でも、カッコいい部分だけでは無いことも分かっています。きっと被災現場では辛い部分や苦しいこともあると思います。そのために、自分はこれからもっともっと体と心を強くしていこうと決めました。

## はるかひまわり

横山小学校4年(当時:横山小学校1年)

佐藤 輝さん



「ほら、種をもらってきたよ」夏休みの前に、お母さんがひまわりの種をもらってきました。小さい種だったので、お母さんが最初にバックに植えて、苗が少し大きくなってから、裏の畑やハウスの周りにお母さんと一緒に植え替えをしました。

このひまわりの種は、「はるかひまわり」と言って、阪神大震災のときに、はるかちゃんという女の子の家のあつ

たところに咲いたひまわりの種だそうです。3月11日の地震で大きな被害があったところに、早く元の元気な町になるようにと、願いが込められて送られてきたんだと、お母さんが教えてくれました。

ぼくは、阪神大震災のことは知りません。でも、今年3月の大地震や津波のことは、テレビで見たり、新聞の写真で見たりして知っています。大きな津波が来て、建物や車を飲み込んでいく様子は、この前もテレビでやっていました。それを一緒に見ていたお母さんは、「ちゃんと見て、きちんと覚えておくんだよ」と言っていました。

3月の地震のときは、学校にいて、校庭で遊んでいるときでした。急にぐらぐらしたので、ぼくはとてもびっくりしました。保健のかおり先生が校舎から出てきて、ぼくたちを集めてくれたので、ちょっと安心しました。

家に帰ると、テレビも電気もつきません。停電でした。ごはんはガスで炊きました。明るいうちに食べて茶わんを洗わないといけないので、お母さんが毎日、「早く食べてね」と言っていました。ぼくの家では電気が止まっただけで、水も出たし、お風呂もまきでたいていたので、毎日入れました。でも、横山小学校に避難していた南三陸町の人たちは、何日もお風呂に入れませんでした。夜も広い体育館では、寒くて眠れなかったと思います。その人たちと比べたら、ぼくの所は良かったんだなあと思いました。

ぼくのお父さんの妹は、気仙沼に住んでいて、向洋高校というところで保健の先生をしています。地震のとき、学校にいて、津波が来るというので大事な書類や薬を校舎の3階に上げたそうです。でも、津波は3階も飲み込み、みんなで屋上に逃げたと言っていました。

その日は、雪が降っていて寒い日だったけど、みんなで声を掛け合い、励まし合いながら、一晩屋上で過ごし、避難所に行けたのは次の日のお昼だったそうです。それも、まだ水が引いていないところを泥だらけになりながら、歩いて行ったと聞いたとき、ぼくはとてもびっくりしました。寒いのに水の中を歩くなると、ぼくにはきつてできないと思います。

向洋高校は、海のすぐそばにあるので車も流されてしまいましたが、お父さんの妹が無事だったので、みんなで喜びました。

夏休みのある日、ひまわりの花が咲いているのに気がつきました。お母さんと植えてから、雨が降らない日はぼくが水をかけてあげました。

「早く大きくなって、大きなきれいなお日さまのような花がさきますように」と、お願いしながら、水をあげました。今では、ぼくの身長を追い越しました。毎日、お日さまに向かって、にこにこしながら咲いています。

ぼくは、このひまわりの種を気仙沼のお父さんの妹にもあげて、家の周りに植えてもらいます。向洋高校のみんなにもあげて、気仙沼がひまわりでいっぱいになってほしいです。そして、前のような元気な町になってほしいと思います。

地震や津波で被害があったところが、早く元のように戻るように、ぼくもこのひまわりをずっとずっと咲かせていきたいです。

## 大震災を経験して

津山中学校1年(当時:柳津小学校4年)

亀井 梨帆さん



3月11日、体育館で卒業式の準備をしていたら、先生が、「地震だ」と言いました。

「えっ。地震」みんな作業の手を止めてぼおとしていたら、ゴォーという地鳴りが聞こえてきて、下からつきあげるように、床がガタガタガタ・・・とゆれはじめました。

「きゃあ」天井の鉄骨がバキバキと音を立て、ライトが今にも落ちてきそうです。わたしたちは、頭を手でかかえしゃがみこみました。先生が、「逃げろ」と、さげびました。わたしたちは床をどのように歩きながら、外に逃げました。

校庭に出てからも地面が大きくゆれ、まっすぐに歩けません。やっとの思いで、校庭のはじの方まで逃げ、みんなよりそいながら、地面にしゃがみこみました。停電になり、こわくて泣いていた友達もいました。他の学年も、昇降口や非常階段から逃げてきました。なかなか逃げられない学年もありました。校舎がぐらぐらゆれて、崩れるんじゃないかとほらはらしました。先生方が校庭から、「逃げろ」と、叫んでいました。

地震は今までにないくらい、ぐらぐらと大きく長くゆれました。近所の家のガラスが、ガチャーンと割れ、瓦がものすごい音で、ガラガラガラガラ・・・と、落ちてきました。泣いていた友達はその音にびっくりして、ますます大きな声で泣きました。私も泣きたくなりました。でも、ぐっとがまんして、「大丈夫だから、大丈夫だから」と、何度も言いました。

空から雪が降ってきました。ジャンパーを着ていなかったのが、寒くて体が震え、「寒いよお」といながら、みんなで固まっていました。その後も、余震が何度も来て、校庭がぐらぐらゆれました。そのたびに、みんなの泣き声が大きくなりました。私も「これからどうなるんだろう」と思うと、涙が出てきました。

何分かして、おじいさんが学校に迎えにきてくれました。おじいさんの顔を見て、「おじいさん。よかった」と、ほっとしました。車の中がとても暖かく感じました。

家に帰ると、家の中は、花びんや植木鉢が倒れていたり、食器が何枚も割れていたりして、めちゃめちゃになっていました。家に帰って家族に会えたのは嬉しかったけれど、余震が来るたびに不安になり、家が崩れてしまうような気がしました。

おじいさんが近所の人から、「大きな津波が来るらしい。北上川が逆流するかもしれない」という話を聞いてきました。

「ええっ、北上川が」 私は信じられませんでした。北上川は家のすぐそばです。ここは海から遠いのに、そんなことってあるのかなと思いました。

「どうする」「ひなんするか」

と、おじいさんとおばあさんが話し合っていました。そして、すぐに避難することになりました。わたしは急いで毛布と上着を持ち、家族で町のふれあいセンターに避難しました。

ふれあいセンターの中は、避難してきた人でいっぱいでした。知らない人ばかりなのかなと思っていたら、れんくん、りおちゃん、はるかちゃんなど、友達が何人かいたので、少しほっとしました。

夜ご飯は、かんパンと非常用の炊き出しご飯でした。少なかったけれど、それだけでもおいしく感じました。停電

だったので、ストーブの火だけが周りを明るく照らしていました。

夜は一人一枚の毛布で寝ました。私は、りおちゃんとはるかちゃんと寝ました。夜中に何度も、数えきれないくらいの余震がきました。そのたびに、係の人が走ってきて、バーンとストーブの火を消しました。

「うわあ。こわいよ」「大丈夫、大丈夫」 3人で抱き合って、励まし合いながら寝ました。余震のたびに目が覚めて、夜がすごく長く感じました。外が明るくなってきたときには、「やっと朝が来た」と思いました。

避難所生活は4日間続き、4日目に南三陸町の人に来るということになり、北上川ももう大丈夫だろうということで、家に帰ることになりました。南三陸町は大きな津波が来て、たくさんの家が流されたと聞いてびっくりしました。北上川も、家のそばのあたりを、何十センチかの津波が上っていったそうです。本当に大きな津波だったんだなと思いました。

家に帰ってからも停電は続き、ろうそくの明かりで生活しました。近所の人と炊き出しをしてご飯を食べました。お風呂にも入れなかったのが、体がべとべとしました。暗くなると茶の間に布団を敷いて、いつ地震が来ても逃げられるように、服のまま寝ました。

「早く余震が収まるといいんだけど」「電気がつかないかな」「しょうがない。がんばろう」。お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、兄、わたし。家族みんなが同じことを思い、過ごしました。1週間ぐらいたって電気がついたとき、「やったあ」「明るいね」「テレビ、テレビ」。家族みんな大喜びでした。

大震災から5カ月がすぎ、私の生活はすっかり元に戻りました。学校では友達と勉強したり遊んだりし、家では家族と楽しい生活を送っています。

近くの町は大津波で家が流され、たくさんの人が亡くなりました。テレビで見たとき、びっくりして声が出ませんでした。何かしてあげたいと思い、学校のみんなで募金をしました。電気があって、水があって、普通にご飯が食べられること、家族や友達に囲まれて生活できることが、実は一番幸せなことなんだなと思いました。

被害を受けた人たちが、一日も早く今までのような暮らしに戻って欲しいと強く願っています。そして、これから私は、普通に生活できることに感謝し、家族や友達を大切にしながら過ごしていきたいと思っています。

## キャベツでみんなが笑顔に

豊里小中学校7年(当時:豊里小中学校4年)

伊藤 美怜さん



私の通う学校は小・中一貫校なので、姉と兄も同じ学校に通っています。姉は9年生、兄は7年生。同じ学校に通うことができるとても心強いです。3月11日の大きな地震のときも、姉たちがいてくれたので、安心して家族の迎えを待つことができました。

あの地震で、私は電気も水もない生活を体験しました。暗闇の中地震に耐えるのは本当に怖くてたまりませんでした。ろうそくの火を見つめながら、家族とくっついて過ごしていました。お水も家族みんなで分けて使いました。でも、私たちの住む登米市の隣り、南三陸町のみなさんは、地震だけでなく津波の被害にもあいました。家を失った方々がたくさん登米市にも避難してきていました。私が感じた怖さの何倍も怖い思いをしたことだと思いますが、その時は自分のことで精一杯で、避難してきている方の気持ちを深く考えることはあまりありませんでした。

夏休みの暑い日、兄の学年が4月から大切に育ててきたキャベツの収穫が行われました。兄の学年では、みんなでキャベツを収穫して被災地のみなさんに届けようという計画を立てていたのです。そこで、私は兄と母と3人で、収穫したキャベツを被災地に届けに行く行事に参加することにしました。

キャベツは全部で50個くらいあるということでした。たくさんのおいしそうなるキャベツを見て、兄たちの思いが詰まっているキャベツを早く届けたいと思います。兄の友達のみずき君とかい君のお父さんが軽トラックで応援に来てくれました。そこへみんなで協力してキャベツを乗せたら、軽トラックの荷台が山のようにになりました。なんだか緊張してきました。うまく話をすることができるかも不安でした。

学校を出発し、まずは学校の近くに泊まっているボランティアの方々にキャベツを届けました。ボランティアの方々はすごく元気に「ありがとう」と言ってくれて、パワーのおすそ分けをもらったようでした。相手を元気付けてあげるためには、自分が元気いっぱいであることがポイントなんだと思いました。

次に花の公園の隣りにある避難所へ届けに行きました。そこには、あまり避難している方々がいなかったので安心しました。

「人が少ないということは、多くの方が自分の家に帰れたんだな」と思ったからです。おばあさんに段ボール2箱のキャベツを渡すと、「今日の夕ごはんでは使わせてもらうからね。どうもありがとう」と言ってくれました。とびきりの笑顔と一緒に。またパワーをもらいました。私は心が温かくなりました。

最後に、あの一番被害の大きかった南三陸町にいきました。南三陸町のボランティアの皆さんもすごく喜んでくれてうれしかったです。少しでも困っている方々のために協力できたかなと思いました。

南三陸町の木は、海の水をかぶり、赤色や茶色になっていました。塩水のせいです。ぺたんこにつぶれてしまった車、元がなんだったのかわからないがれき、天井と床だけしか残っていないビル、線路はぼつぼつと消えていました。テレビで見ていた光景とまるっきり同じで、家はほとんどなく、あるのはたくさんのがれきと、今では静かに波の音をたてている海だけです。私は驚きと悲しみで苦しくなりました。

しかし、そんな町に一つの希望が見えました。海とがれきに挟まれた真ん中に、たった一つの小さなコンビニががんばって耐えていたのです。お店は開いていて、町の人たちが買い物できるようでした。

このお店は、町の人たちや、今は町を離れて避難している皆さんに勇気を与えているのだと私は思いました。お店を開いた方は、自分も被災しているのとても大変だったと思います。でも、町の皆さんを笑顔にするためにがんばっているのです。最初は自分のことしか考えられなかった私ですが、被災した人もそうでない人も、みんなで協力することが大切だと感じました。

今回兄と一緒に、災害後初めて南三陸町に行ってきた、できるだけ早く元の南三陸町の姿に戻ってほしいと思いました。だから私もこつこつとできることをしていきたいと思います。今クラスみんなで話し合っていることは、休み時間は電気を消すこと、歯みがきはコップ1杯の水にすることです。その他にはできることはないか考えていきたいと思いました。

キャベツから生まれたたくさんの笑顔。その笑顔が消えないように、もっとたくさんの笑顔になるように、みんなで協力して乗り越えていきたいです。

## あの時、鱒淵地域と被災地避難者との記録

東和町鱒淵  
小野寺 寛一さん



3・11東日本大震災は、私たちに大きなショックを与えながらも、私たち以上に大きな被害を受けた被災地には、何もできないジレンマにあったように思われる。

地域内でも家屋の被害があったものの、人命に関わるのが少ないことが幸いしていた。

そうした中で3月19日、旧鱒淵小学校の体育館に明かりが灯った。ボランティアRQが、災害地支援物資の東北本部基地としての活用だった。地域民は「最初は、何者が?」と、不安の念に包まれ、見守る感じだった。南三陸町中瀬町行政区が鱒淵を選び指定して、避難仮設宿舎として活用が始まったのは4月4日である。

旧鱒淵小学校に決まってからの地区民は、近隣地で、親類、知人も多い中で、「私たちにできることをやろう」と、その役割を地域の方々と話し合った。

誰かに頼まれたことや、行政に依頼されて動く、今までの行動とは違った「できることを、できることから」でのボランティア活動が地域活動となった気がする。

旧鱒淵小学校に南三陸町中瀬町行政区から120名の方々が、バス2台で来た。地域民あげての出迎えと、商工会や婦人会の有志の方々での昼食の準備・提供があり、親類、知人との無事を確認し合い、再会の喜びに話しが弾むひとときであった。

数年前の廃校で、特に使用がなかった校舎全部に明かりが灯り、生き返った施設となり、命が吹き込まれた

ようだ。

今までの避難場所での食事は、炊き出しはあったが、おにぎり中心で、この寒さの中で冷たく、そして、インスタント食品が主であったこと。寝る場所は、寿し詰め<sup>すし</sup>の体育館、脚を伸ばすことはできても寝返りもできず、相手の頭に足が届く始末とか。特に夜のトイレは人を踏みつけないように静かに探し、高齢者の夜中の使用は身に堪えたとの話も聞く。鱒淵に来て、温かい歓迎が身にしみ、特に「暖かいご飯とはっと汁」をおいしくいただいたという声が聞かれた。

避難者は鱒淵の道路をマスク姿で何もすることなく、ブラブラと歩く姿は異様な雰囲気<sup>きふき</sup>で、日増しに増えた。「動かないと足腰がだめになるからね」との散歩である。

地域の人たちが「声掛けとあいさつ」運動の奨励に努めたのも、鱒淵の心のもてな<sup>な</sup>しだった。畑、田んぼで、出会った時の朝夕のあいさつと「大変でしたね」との、思いやりの一言は、地域民と被災者の絆のきっかけを一層強めることとなり、気易く話し合う雰囲気<sup>きやす</sup>づくりともなった。

前の日まで、農作業や漁業、家業と一生懸命だったのに、住む家も何もかも無くしてしまった無念と、これからの不安が募る中での避難場所「鱒淵」である。

ホテル会館前の農園は、復興支援農園としての活用をと、中瀬町行政区長と相談した。

春野菜の種まきと植えつけ時期であり、身体を動かし、収穫の喜びをと、活動に入ることになった。ただ、種や苗がないので奔走し、多くの協力をいただいた。作付品目は馬鈴薯、なす、トマト、ピーマン、ネギ、枝豆だった。

今後、仮設住宅ができて、帰る時には、お土産に持って行きましようとの合言葉で作業にも精が出て、共同



ホテル会館前の畑を利用した野菜作り

作業は災害を忘れる時間でもあったと思う。

この農園活動は避難者のふれあい交流と、健康づくりの心ともなったようだ。朝の散歩は、学校からこの場所までの約1.5キロで、丁度良い散歩コース。自分たちが作るとなると、力の入れようも違う。毎日、朝晩にその状況を見ながらの歩くことは、励みにもつながっていった。

我が家は、ホテル公園の近くにあり、「何ができるか?できることやろう」と、長屋を開放して、南三陸サロンと名付けて休憩、休み場所を提供した。夜には、被災者とボランティア、地域の方々との話し合い交流の場となった。

仮設住宅が完成し、4か月間の避難生活が終えて、8月3日には、いよいよお別れ会となった。県道には「サヨナラ、南三陸の復興を」と、学校にも「絆を大切に」という看板が設置された。地域民のアイデアである。大勢の地域民の方々が参加して、別れを惜しみ、早めの復興の励まし会ともなった。

南三陸中瀬町行政区は丸ごとの避難場所だっただけに、その組織的行動は区長を中心にまとまりのある避難活動に見えた。

毎日、朝晩に開かれる班長会議ミーティングでの情報の共有は、組織の力だと感じた。校舎隣の体育館には、ボランティアRQの東北本部の方々の支援と交流も大きな力となった。

夜のミーティング時に、鱒淵情報を提供し、避難者のお世話をさせていただいた。ニュー鱒淵ふるさとだよりも8号と交流情報を伝えあった。

行政の職員や、地域から選出された支援員の避難者に対する心遣いや援助は、皆に感謝されていた。

芸人や各方面からの慰問訪問も多くあり、地域の人にも声がかかり、一緒に参加させていただいたことも有意義なつながり、絆となった。



鱒淵小学校で開かれたお別れ会 写真左は南三陸町佐藤町長

地域の祭りの際にも案内を出し、積極的

に参加していただいた。4月に行われた春季鱒淵華足寺大祭には、避難された方からも踊りやカラオケの参加もあり、癒やしの場となったことも思い出の一つであろう。この華足寺に鱒淵小学校に避難された方々の名前を書いた復興祈願の掲額もして、この惨事の教訓と明日への復興の記録として、後世への道しるべとなった。

鱒淵は6月末には国の天然記念物源氏ホテルが飛翔し、観賞客でにぎわうが、地域とボランティアと協力して、ほたる祭りが行われた。

夜になると、避難された方々は、夕食もほどほどに毎晩ホテル観賞に行く人が多くいた。あの暗闇で光る淡い神秘的な光は、震災で亡くなった魂が見えたという方もいて、心を打たれた。ホテルは光り輝き、生きることの大切さも教えていたようだった。明日への南三陸町復興の光として、キラリと光った。

あれから、3年が過ぎようとしている今、南三陸町から避難された方々との交流は、強い絆として続いていることは意義深い。

新しい地域づくりは風土づくりとも云われ、多くのふれあい交流から生まれるが、避難された方とボランティア、そして地域での活動は続いている。避難された方との関係で、何と言ってもRQボランティアは、鱒淵に24カ国45,000人が来て活動したことは特筆で、避難者、地域、ボランティアの三角関係が地域、風土づくりの原型になっていくことを期待している。

避難者とボランティアなどで、「ニュー鱒淵ふるさと会」も発足している。この会は、鱒淵を好きな人を中心にしたふるさと運動活動体であり、気張らずに情報交換し今後、イベントも計画している。

地域のお祭り「華足寺大祭」への招待は、毎年行われ、復興祈願と同時に御膳あげ行事や演芸への協力も一緒に行う仲となった。

ほたるの季節にも招待し、一緒にほたる見学と話し合い交流が行われている。

ホテル会館前の支援農園では、地域のボランティアの方々が、生産収穫した農産物を仮設住宅に届けて喜ばれるなど、一層の絆を強めている。

今、世界中のみんなの願いは、早めの震災復興であり、この自然災害から多くのことを学び、助け支えること、記録を後世へ伝える事など、各種の防災に一層の意識を高めていく必要を感じるこの頃である。

## 青い空、大漁旗と かき氷

吉田コミュニティ運営協議会事務局長 吉田公民館 館長  
菅原 直行さん



平成23年

3月9日(水) 旧善王寺小学校の校庭に、地元のグラウンドゴルフ愛好会メンバーが勢揃いしました。この日は奉仕活動で、樹木の剪定作業を行う日です。脚立に乗り、刈り込みバサミで植木の手入れをする姿は、とても70歳を超えた皆さんとは思えませんでした。

植木や校庭の雑草もきれいになったその時、強い地震がありました。「脚立に登っている時でなくて良かったあ」との声。旧善王寺小学校校庭利用団体のボランティア作業の一日でした。

3月11日(金) 午後2時46分、東日本大震災が発生。

4月14日(木)、15日(金) 善王寺小学校屋体及び平筒沼youyou館に、南三陸町からの二次被災者の受け入れが決定され、急きょ、地元の吉田コミュニティ運営協議会の役員や行政区長会、米山町ボランティア連絡協議会などのボランティアが招集されました。しかし、市側の連絡体制が徹底されていなかったために、地元参集者が解散後、避難者が入所するという不手際も起きてしまいました。

南三陸町からの避難者については、平筒沼youyou館に40人、旧善王寺小体育館には80人、また旧善王寺小学校の校舎には戸倉小学校と戸倉中学校の児童生徒の受け入れを確認したところです。

緊急役員会(コミュニティ役員、区長会、ボランティアグループなど)をyouyou館で開催し、今後の対応方針を協議したほか次のことを確認しました。

1. 自分たちができる範囲のお手伝いをする。
  2. 震災の話は聞き役に徹する。自分たちから話題としない。
- を活動の核とすることを話し合いました。

4月22日(金) 吉田コミュニティ運営協議会が管理している善王寺コミュニティセンターの利用については、戸倉小学校と戸倉中学校に限り、平日の授業での利用を認めることとし、仮設トイレの設置や施錠管理の明確化など子どもたちの教育環境の整備を急ぎました。また、受け入れ後には、被災者の方に対して春の歩け歩け大会や、グラウンドゴルフ大会への参加を通じて地元との交流を促しましたが、まだ落ち着かない状態のようで、参加の希望者はありませんでした。

5月24日(火) 地元の昔話「平筒沼ものがたり」(佐々木智氏編集)を井崎米子氏の朗読で聞いていただく機会を設けました。この話は昔、戸倉から行商に来ていた人の物語ということで、南三陸町の被災者の皆様に好評を博しました。6月に入り、PTA参加の授業参観などの学校の行事も通常通り開催されるようになりまし

た。避難者の方々からは、昼食の提供などの要請が増えてきました。

戸倉小学校と戸倉中学校に関わるボランティアの方々も定着してきたので、地元コミュニティ運営協議会、東京災害ボランティア、市社会福祉協議会米山支所などの皆さんで打ち合わせ会議を持ちながら、さまざまな要請に対処できるように役割分担を決めていきました。当吉田コミュニティ運営協議会は、自分たちが出来る範囲の中で速やかに対応することを合言葉に活動してきました。

7月2日(土) 戸倉小学校スポーツ大会

雲一つない青い空、万国旗に代わる大漁旗が旧善王寺小学校の校庭にはためきました。久々に響く子供たちの歓声。

善王寺地区に、こんなに人がいたのかと思われる程のにぎわいでした。地元区長会をはじめ、各ボランティアグループが出店を担当しました。開店前から長蛇の列ができた「かき氷コーナー」を担当した吉田公民館の高橋和恵さんからは、「手が凍傷になっちゃう!」とのうれしい悲鳴も上がりました。

子どもたちの笑顔がはじけた一日となりました。



青空になびく大漁旗

7月7日(木) 七夕飾りの竹竿探し

戸倉中学校の谷山知宏教頭先生が、この震災で学校が旧善王寺小学校に移ってから、自前で新車の軽トラックを購入したとのこと。この軽トラックが、通勤や物資調達に大活躍している中、七夕飾り用の竹竿を近所から見事ゲットし、目的を達成することができました。先生方の一生懸命な姿が子どもたちにしっかり伝わっていることを確信しました。

この時期からホンダのアシモ君が、善王寺コミュニティセンターで実演されるなど、企業や各団体、芸能人、スポーツ選手などが続々とボランティアで来校し、子どもたちに元気を与えてくれました。

11月3日(木) 戸倉中学校の文化祭で、昼食ボランティアを実施しました。メニューはカレーライスで、どの生徒も満腹になること受け合いました。提供後、生徒たちの素晴らしい作品を鑑賞し、絵画コーナーに釘付けになりました。生徒たちの、対象を良く観る姿勢に驚かされました。

平成24年

2月18日(土) 戸倉小学校・戸倉中学校の感謝の会

旧善王寺小学校にいてほしい。いたい……。

さまざまな想いを胸にお別れの会が開催されました。

子どもたちから、お世話になった皆さんに。また、子どもたちから頑張る力をもらった地元の皆さんから、子どもたちへプレゼント交換が行われました。

「ありがとう」の言葉に万感の想いと涙、握手の温もりに、明日を信じられる心が大きく膨らみました。

3月16日(金) 戸倉小学校の卒業式と卒業ライブ

旧善王寺小学校から、まさか巣立つ子どもたちを送ることがあるのかという不思議な気持ちの中、麻生川 敦校長先生の温かな式辞、それから校長先生や他の先生方、力を合わせた戸倉の子どもたち、地域の皆さんと過ごしたこの1年間を思い起こすとき、自分の中に、皆さんとわずかながら関わったことに感謝の気持ちがいっぱいになった素晴らしい卒業式でした。

3月23日(金) まだまだ続く熱い絆

戸倉小学校の子どもたちが南三陸町に戻った後も、戸倉小学校の少年野球チーム「戸倉ブルーウェーブ」から、練習の場所がないため旧善王寺小学校の校庭を利用申請してきました。市教育委員会に働きかけた結果、4月1日から練習が可能となりました。平成25年10月現在も旧善王寺小学校での練習を継続中です。

この1年間、本当にコミュニティの底力を感じさせられました。まだまだ問題が山積しています。現実を見つめ、着実に進んでいこうと意を新たにしています。

## 自主防災互助会の スピーダーな対応に感銘

登米市民生委員児童委員

かつ きよ  
佐々木 勝清さん

震災当日私は鹿島台で仕事をしておりましたが、突然の大地震、常識を上回る未曾有の揺れで、自然の猛威になすすべもなくただただ地面には這いつくばるばかりでありました。

ここ数年で宮城沖地震が起こるだろうと言われ、覚悟はしていたものの、これまでに経験のない巨大な地震が発生するとは思ってもよらなかった。陸地は地震被害だけでなく、家屋の倒壊、路面の沈下・亀裂の被害が多く、特に橋げたの付け根が沈下し、路面と段差ができたため通行できない状況でありましたが何とか自宅に帰りついたところでした。

帰宅してみれば、自宅は倒壊から逃れたものの、電気器具、家財道具などが散乱し、どこから手をつけていいのやら施しようのない状況でした。家族の無事を確認し、担当地区の要援護者の安否が気になり、すぐさま巡回を行いました。運良く誰一人としてけがもなく皆無事でおりました。

これだけの震災で、ライフラインはすべて絶たれ、どうする事もできない状態で、回復するまでどう支援していけばいいのか戸惑っていた時、区長から集落の自主防災互助会の活動を開始するので協力してほしい旨の連絡が入り、互助会のメンバー共々集会所を拠点とした避難所を作り上げ、被災者はもとより高齢世帯者や一人暮らしの方々を案内し、3～4日ほどお世話をしたところでした。

市でも支所を中心に避難所を開設し被災された住民の面倒を見たとの事があります。それはそれでいいのですが、こういった時の活動の基本は、なんといっても隣近所の助け合いが基本ではないかと痛感したところがございます。

その点、当集落の区長を中心とした自主防災互助会のスピーダーな対応に感銘しているところでもあります。当然、被災された住民や高齢者、一人暮らしの方々からは感謝されたことは言うまでもありません。

現在は田舎でも、近隣の交わりが少なく疎遠になりがちですが、あえて意識的に交友を広め、事有るたびに団結できる集落作りが、こういった災害時の最大の防衛手段ではないかと思わせられた震災でありました。



自主防災組織による炊き出しが各地で行われた



## 市内最大規模の避難所 ～迫体育館・公民館～

文化・スポーツクラブはさま 代表  
佐藤 砂登史さん

東日本大震災により被災された方々に対し心よりお見舞申し上げます。

平成23年3月11日午後2時46分、正にEarthquake!地球が大きく揺れた。今までに経験の無い揺れに車中から飛び出す事もできず横転も覚悟で収まりを待つ。直後にクラブマネージャー斉藤から携帯連絡により、迫体育館や隣接する迫公民館の利用者を公民館の職員とともに館前の中江中央公園に避難させたとの報を受ける。ついで、及川施設マネージャーから迫武道館の利用者の安全確保と現状の確認を行うとの報告が来た。私自身も近くに滞在していた事もあり、もうひとつの管理施設である新田総合運動場へ向かった。運動場は利用者がいなかった時間帯であり、施設の被害も少なく安全であることを確認した。

その頃、一時避難所となっていた中江中央公園では小雪が舞う中、設置したテントにおよそ80名が身を寄せ合っていた。日暮れの時間が迫っていたこともあり、迫教育事務所長兼迫公民館長の関館長と協議の上、急きょ、迫体育館を避難所として開館することとなった。施設の安全確認後、迫総合支所市民福祉課職員、迫公民館職員、当クラブ職員が一体となり、大会用として体育館の倉庫に置いてあった柔道の畳やシートを配置し、避難された方々を受け入れる。

ついで、市民福祉課高橋課長の指示で避難者名簿の作成が始められた。この名簿が後に行方不明者の捜索に大活躍した事は周知の事実である。避難者は時間を追うごとに増え続け、およそ1000人を数えた。段ボールと水を使っての非常食を準備する中、ヨークジョイプラザやSB食品工場、スポーツアカデミー佐沼(当クラブと業務提携を結んでいる)など近隣事業所から次々と支援物資が届いた。

しかしながら、詳細な情報は入らないまま一夜を迎えた。翌日地元コミュニティFMである、はっとエフエムや販売店から届けていただいた新聞により未曾有の大震災であった事や、登米市内でもあちこちで建物が倒壊した事がわかり、地震の被害の大きさを知った。

停電、断水の続く中、炊き出しによる配給や仮設トイレの手配、暖房器具や燃料の確保、健康管理(体育館内に上杉皮膚科先生による仮設診療所を設置し、酒井接骨院の先生による相談所の開設、スポーツアカデミー佐沼のスタッフによるストレッチ教室なども実施)など1,000人を超える避難されてきた方々の避難生活がいつまで続くか解らない不安の中、正に、互いの絆で過ごした10日間であった。それぞれの方々に感謝、感謝です。最後に「今日生きる喜びは、意味無く犠牲に遭われた方々が生きたかった一日、大切に生きよう!」



届けられた食料が慌ただしく配られていった  
(3月12日 迫体育館)

## 学校が避難所に、 ～登米市立横山小学校～

登米市教育委員会 生き生き学校支援室長(当時:横山小学校 教頭)  
千葉 整さん



子どもたちを保護者に引き渡し、散乱した机や椅子の片付けをして一段落ついた頃、戸締まりのため体育館に向かいました。午後4時30分頃だったと記憶しています。夕暮れ迫る中、6～7人程の人々が校庭を横切って私の所に近づいて来ました。

グループのリーダーらしき男性が、「助けてください。ここに避難させてください」と声を掛けてきました。「どうしたのですか」と尋ねると、「自分たちは戸倉から来た。志津川は、津波で全滅した。荒町地区(横山峠を志津川方面に向かって下ったすぐの地区)に逃げたが、その荒町も危ない…。歩いて峠を越えて逃げてきた」とのことでした。

帰り支度をしていた職員にお願いし、すぐに体育館の避難者受入準備をしました。

ほとんどの方が着の身着のままの状態でしたから、まず、少しでも体が暖まるようにと家庭科室と職員室のガス・コンロでお湯を沸かして、お茶を用意しました。この間に、体育館の床にブルーシートを敷き、その上にあるだけの運動用マットを並べ、床からの寒さを防ぐようにしました。保健室にある毛布やタオルケットなども可能な限り配りました。しかし、時間の経過とともに、それだけのスペースと物資では対応できないほどの避難者が集まって来ました。11日の夜には、30人近い方々が体育館に避難していました。その後も助けを求める方は後を絶たず、12日には200人を超える方々が体育館に集まりました。

横山地区では、平成21年の秋に豪雨による小学校での避難所開設を経験しており、地区住民による支援体制が確立されていました。騒ぎを聞きつけた地区の皆さんが、毛布や布団などを次々に運び込んでくださいました。また、おにぎりの支援はもちろん、地区を輪番にした炊き出し体制もしっかりとできていましたので、食事に関する心配は、全くありませんでした。

市による避難所運営体制も11日の夜には整いました。その後、市の避難所運営者と学校との調整役として横山小学校の男子職員が4日間程、交代で宿泊した以外は、全て市の職員の皆さんによる避難所運営が行われました。避難所開設当初から運営準備に当たってくださった市の職員の方は、その後3日間程、24時間体制で体育館に詰めていらっしゃいました。日を追うごとに見られる憔悴しきった顔を見る度に頭の下がる思いでした。あらためて感謝申し上げます。

## 災害派遣先発隊としての活動概要

登米市消防署主幹兼警防救助係長 消防司令  
ひて あき  
**岩澤 秀明**さん



宮城県広域消防応援基本計画に基づき大崎ブロック隊として、大崎、栗原、登米消防の3部隊が合同で南三陸町志津川地区へ応援活動に入るようになった。登米市消防本部に集結が完了し、消火隊3隊、救急隊1隊、後方支援隊2隊が出発したのは深夜の2時過ぎであった。

水界峠を越え海側へ進むと、津波による瓦礫が小森地域にまで押し寄せ、国道を塞いでいた。瓦礫の層はかなり高く、奥行きも不明なため、夜間の通過は不可能と判断し、夜明けを待つことにした。暗闇には、海水と土の臭いが混じり合った異様な臭気が漂っていた。われわれの待機中に、建設業者の懸命な重機作業により、夜明けには徒歩での通行が可能になっていた。

最初の任務は、音信の途絶えている南三陸消防署へ行き、署員に接触することであった。瓦礫を抜け、足早に進んだ先には、漁船が寄り掛かり、内部に瓦礫が入り込んだ消防庁舎があり、目を疑うような志津川の惨状が広がっていた。冷静さを保つよう自分に言い聞かせ、我々の第一の使命である人命検索活動を開始した。消防署周辺から検索を続け、志津川病院にたどり着いたころには、すでに屋上から自衛隊ヘリコプターによる患者移送が繰り返し行われていた。病院の1階からくまなく検索を行い上階へと進んだ。最上階の5階には大勢の患者が避難しており、懸命に対応する医師と看護師の姿があった。救出体制が確立されていたことを確認したので、高齢者がまだ大勢取り残されているという高野会館へ向かった。一帯は冠水し、50センチ前後の潮位変化が続いており、瓦礫を渡り板代わりにしなければ移動できない状況であった。高野会館では救出活動中の南三陸消防署の消防隊と合流することができ、合同で介添えをしながら、逃げ遅れた方々の避難誘導を夕刻まで続けた。夜にはベイサイドアリーナに設けられた災害対策本部の調整会議に入り、明日の活動内容を確認した。

夜遅くには志津川地区での活動が決定した京都府隊が、ベースキャンプの中田アリーナに到着した。時間感覚が麻痺する中、全国から次々と駆け付けていただく大勢の緊急消防援助隊と共に、長期に及ぶ災害活動が展開されることになった。

## 警防本部対応及び先行調査活動

登米市署警防救助係主査 消防司令補  
とし ひろ  
**高橋 俊洋**さん



当時、消防本部警防課員だった私は、大きな揺れが収まる間もなく、「非常災害時における警防本部等運営計画」に基づき、防災会議室に警防本部を設置し、情報収集及び活動調整を開始した。市内の所々でも災害が発生している中、沿岸部に大津波が襲来し壊滅状態との情報により、宮城県広域消防相互応援協定に基づき、気仙沼市への先行調査及び気仙沼・本吉消防本部との活動調整を命じられた。津波被害による沿岸部の通行止めにより、積雪の山中を迂回しながら進行し、気仙沼・本吉消防本部に到着した時には出発して3時間が経過していた。途中、山頂から見えた気仙沼市街で発生している火災の炎と空焼けが、今起きている大惨事を象徴しているように感じた。気仙沼・本吉消防本部に到着すると、被災した南三陸町の役場や消防署の被害状況や詳細は把握できていないという。さらに気仙沼市も被災し応援隊を派遣できないことから、大崎ブロック隊（大崎消防、栗原消防、登米消防）については南三陸町での活動を要請され、当消防本部からも9日間、延べ66人による救助、検索活動が開始した。

12日の昼、宮城県消防応援活動調整本部から、南三陸町で活動を行う緊急消防援助隊の活動拠点の確保、支援体制の調整を登米市で行うことが決定され、京都府隊50隊187名を古川インターへ、13日には鳥取県隊14隊58名を桃生津山インターへ誘導に向かった。遠路を駆けつけてくれた仲間の、果てしなく長く続く赤色灯がとても心強く感じたことを覚えている。

その後は、市内での情報収集や活動調整を行うとともに、南三陸町災害対策本部、県内応援隊、道府県隊との活動調整、情報提供などを緊急消防援助隊の活動終了まで実施した。この間、私が直接救助や検索活動を行うことはなかったが、消防人として現場で活動し「一人でも多くの人を助けたい」という気持ちで、常に心の中で燃<sup>くすぶ</sup>っていたのも事実である。

今回の震災においては多くの尊い命と財産が奪われた。私たち防災関係者は、この教訓を後世に伝え、一人でも多くの命を救えるよう今後も職務を全うしていく所存である。

## 震災時における 災害拠点病院としての在り方

医療局登米市民病院看護部 副総看護師長

佐々木 薫さん



当院は震災により甚大な被害を受けた南三陸町および石巻地区から約30kmの位置にある、本館と南館各6階建ての2次救急医療中心の災害拠点病院である。

平成22年度の救急車収容台数1,600台、休日夜間の時間外患者は6,000人であった。今回の震災時には南館全体の耐震補強工事中であり、使用できる入院ベッドは196床であった。本来であれば3月末の工事終了を待ち、新たに登米市民病院として228床の病院となる予定であった。

震災発生時には通信機器の使用ができず近院の災害状況が把握できないまま、5分後には災害対策本部を立ち上げ救急診療を行っていた。

震災発生2時間後に、南三陸町で母親を津波から助け出し流された畳のひもで自分の体に結え、登米市に向かう途中、車で連れてきてもらったという50代の男性が来院した。その男性から沿岸部では甚大な被害があり、数百人が登米市に向かい歩いている、という情報を得た。

その時点で当院は登米市だけでなく沿岸部の住民に対応しなければいけないと判断した。救急外来は当時プレハブの診療棟で大型発電機にて診療していたため電源の確保はできていたが、本館は非常電源での対応により検査システムの回復、ガス、エレベーターの回復には2日間を要した。救急車は事前連絡のないまま全例を受け入れた。

震災2日目から国内、海外合わせて5隊のDMATに来院いただいたが全て南三陸町への支援を依頼し、当院常勤医師15人で診療を継続し1週間で130台の救急車、約700人の救急外来患者の治療に当たった。

被害の少なかった登米市民の通常の来院が混乱を招くと予想し、震災3日目からは一般外来の診療も開始した。近院の状況を十分に把握できないまま全ての患者の診療に対応したが、被災した患者の帰宅場所がないとわかると本来は入院対応でない在宅酸素療養患者の入院も受け入れていた。

その後病床が不足するという事態が生じた。耐震補強工事中の南館はほぼ完成していたが、受け渡し前のため使用できなかった。また連絡通路の亀裂が生じ、畳を使用しての往來を行なった。帰宅不能な患者とその家族を登米市内の避難所への搬送方法が確立できたのは震災5日目であった。

少ないスタッフで最大限の診療に当たってはいたが、病床が不足する状態が続き入院患者の受け入れが困難という問題に直面した。病院が失われた地区の人々に対しベッドが無いとはなかなか言えず、当院で治療困難と思える患者を更に内陸の遠い病院へと紹介するのは心痛の想いであった。

災害時には入院適応でない判断された被災者が早期に避難所などに移動できる搬送体制と連絡方法の確立が望ましいと感じた。

病院周辺にそのような避難施設があれば医師の往診も効率的に行え、多くの住民の手助けができると思う。今後行政と共に考える必要性があると感じる。

今回の震災では当院のような二次医療機関でも後方支援の在り方を再度考える必要性があると考えた。

いずれ起こると予想された内陸型地震を想定し当院で行っていた研修は、当院の入院患者、搬送されてきた

重症患者をいかにスムーズに三次医療機関へ転院させるか、DMAT対応はどうあるべきかなどであった。今後は災害拠点病院として転院患者の受け入れに関しても行政と共に検討、研修する必要があると思われる。

当院は患者さんの住所だけでは津波を体験した方かどうか判断が困難な位置に病院がある。今後は広範囲な地域を視点に入れ精神的なケアも充分に行う必要がある。

今回当院への医師の派遣をいただいた登米市医師会、東北大学病院および当院医師の疲弊が強くみられた3月末から救急外来診察を応援いただいた順天堂大学医学部付属浦安病院の皆様にも感謝申し上げます。また、患者転送に協力いただいた登米市消防本部を始めとする多くの救急隊員の皆様にも感謝申し上げます。

## 登米市斎場の夜間火葬について

企画部財政課課長補佐(当時:市民生活部環境課主幹兼生活環境係長)

田辺 賢一さん

災害対策本部から「南三陸町の津波による犠牲者が多数のため、遺体の火葬協力を行う」旨の指示が3月12日(土)にありました。

当時は、送電停止により自家発電装置を使った火葬が想定され、通常時では1日8件の火葬が行われるところ、自家発電装置の使用の場合では最大で6件の火葬が限界でした。

その時点での被災者想定数は、最大で南三陸町民の半数である7~8千人となる可能性がありました。登米市では、年間に約1千件の火葬利用がありますが、実にその7倍に相当する件数に対応する必要があったため、昼間に加えて夜間にも火葬を行う事を決定しました。

3月14日(月)夕方には、一般家庭ではまだ停電状態でしたが、登米市斎場には電力の供給がなされました。

夜間の火葬については、指定管理施設委託先の榊清建と南三陸町との業務打ち合わせを行った後、夜間分の業務委託契約を締結し、3月16日(水)から夜間の火葬を開始しました。初日については、夜間9件で午前0時30分に終了しました。

その時点の登米市斎場のホールでは、火葬の会葬者の多くがテレビニュースを食い入るように、一心に見ていたことが特に印象的でした。また、斎場ホールのロビーでは、携帯電話の充電器を準備したところ好評で、充電中の携帯電話の次に、自分の携帯電話を置いて、整然と順番を待って利用されていたことに、スタッフ一同とても感心させられました。

夜間火葬の際に、会葬者の代表の方からスタッフにいただいたお言葉を紹介します。



登米市斎場 震災時屋外には自家発電機と仮設トイレが設置された

「家も財産もすっかり流され、何もかもなくなっていました。家族も失いぼうぜんとしていましたが、無事に火葬をしていただきました。感謝します。区切りがつかしました。これで前へ向かって歩き出せます。本当にありがとうございました」

3月25日(木)からは最大運用として翌朝4時まで、夜間分で12件体制をとり、3月31日(木)まで継続して実施しました。なお、南三陸町以外の区域の方の火葬については、市民の予約のない昼間に、1日最大2件までを受け入れて実施しておりました。

最後に、東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

## 登米市の避難者 受け入れ態勢

福祉事務所生活福祉課主幹兼生活保護係長(現登米診療所事務局長)

佐川 英弘<sup>ひでひろ</sup>さん



平成23年3月11日、午後2時46分、当時私は福祉事務所生活福祉課に勤務していました。

その日は年度末と言うこともあり朝から慌ただしく過ごしていましたが、午後から予定していた用事を済ませ外出先から戻り自分のデスクに着いた時、今まで経験したことがない長く大きな揺れに見舞われました。

夕方から各地に避難所が開設され、電気、水道といったライフラインや電話などの情報が途絶えた中で、よもや南三陸町に津波が押し寄せた事など夢にも思わないまま1日目の夜を迎えました。

大震災発生から2日目の3月13日、今日の自分の任務は何かと不安とあせりのまま職場に車を走らせ、その日も、いつも通りの朝礼が始まりました。所長より今日から南三陸町より250人の避難者を登米市で受け入れる旨の話があり、第一陣が正午、避難所は登米中学校体育館という事でした。登米は私の地元でもあり、何かの役に立ちたいと思っていた矢先、所長から私に避難所開設準備に当たれと言う指示がありました。

不安を抱いたまま私ほか二人の職員は、登米中学校の体育館に急ぎました。着いてみれば何もなかったかのような、がらんと寒々とした空間、すべての時間が止まった体育館は、これから南三陸町の避難者が新たな時を刻み込むにふさわしい場所とは到底言いがたいものがありました。

避難者の到着まであと2時間を切った頃、町内の防災無線による寝具、衣類、その他日用品の協力放送があり、体育館はあっという間に物資の山になり、受け入れ予定の人数に足りる物資が揃い、あとは到着を待つばかりとなりました。しかし、私には衣食の事だけではない最大の悩みがありました。

それは、避難者の心のケアでした。食べ物や衣類が豊富にあっても、避難者が毎日下を向いて涙を拭う姿はとうてい私には解決不可能と思われたのです。

避難所開設から3日後、私は避難所に自治会を立ち上げる旨の提案をしました。幸い、避難者の中に町職員もいたことで、その方々がリーダーとなり我々、市職員と自治会が日々生活の場としての役割分担を担い、避難所の統制を図ったのです。そのことにより、避難所は避難者の自主運営となり、南三陸町の人々の精神力、団結力、自立に向けた気概が強く感じられ、心配していた心のケアどころか、私自身が勇気付けられる日々となりました。